

令和3年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数417点

(敬称略・五十音順)

【最優秀賞】

夫婦の役割分担の多様性

片山学園 中学校3年 高安 玲杏

【優秀賞】

「自分らしく生きられる世界」

片山学園 中学校2年 大浦 彩波

男性・女性の在り方

片山学園 中学校3年 斉藤 利叶子

「箱」を壊せ

堀 川 中学校1年 村田 朔桜

「一人一人が輝ける社会を」

西 部 中学校2年 山岸 祐大

【佳作】

社会全体で支え合っていくために

堀 川 中学校3年 相地 葵生

おじの育休取得で感じたこと

堀 川 中学校1年 大橋 美亜子

認め合える社会へ

南 部 中学校3年 岡本 愛佳

「自分らしく」生きやすい世の中へ

西 部 中学校2年 角 綾花

～性別にとらわれない社会を目指して～

南 部 中学校1年 楠本 陽

男女平等とは

堀 川 中学校3年 积永 小夏

産後でも女性が輝ける社会

片山学園 中学校3年 武内 泉樹

紫色の社会を目指して

八 尾 中学校2年 谷井 真緒

性のイメージ

芝 園 中学校3年 長井 美羽

輝く参画社会への第一歩

堀 川 中学校3年 森川 真尋

最優秀賞

夫婦の役割分担の多様性

片山学園中学校3年 高安 玲杏

男性は外で働き、女性は家庭で家事や育児をする、というスタイルは、現代では見直されるべきだとされている。確かに私も、性別によって夫、または妻としての役割が決まってしまうのはおかしいと思う。男性が家事や育児をこなして、女性が仕事をしてお金を稼ぐという昔にはなかった考え方が、世の中の「当たり前」としてもっと広まって、世間一般の思想を更新していく必要がある。

しかし、仮に「男性は仕事、女性は家事、というスタイルを変えるべき」という意見を貫くとすると、一つおかしいことがある。昔ながらの思想に倣って、男性は仕事、女性は家事、という分担が不正解だとされてしまうということだ。

私の祖父母の世代は、昔ながらの思想が主流であったため、私の母は夫である私の父の両親と関わっていくうちに、自分との夫婦の考え方の違いを実感したらしい。母は、妻である自分は子育てのみに集中していると自分の夫の両親に伝え、内緒でパートタイムで働いた。夫の両親に心配をかけないために、あえて働いていたことを言わなかったという。きっと当時の母は「自分たちのやり方」を優先しつつも、夫の両親の考え方を否定しないようにしようと考えていたのだと思う。

私はこの体験談を聞いて、昔ながらの思想にとらわれない、というよりかは、「他人との考え方の違い」にとらわれない、ということが大事だと思った。それぞれが、自分たちらしく活動していくのが一番だと思う。夫婦の役割の分担が人によって異なるのは、当然前のことで、他の夫婦を見て、彼らを否定してはならないし、逆に自分たちが変わる必要もない。これからは、夫婦で手を取り合って、対等な立場で、互いに家族を養ってゆける関係が、多種多様な形で築かれていくべきだ。

優秀賞(4点)

「自分らしく生きられる世界」

片山学園中学校2年 大浦 彩波

富山市内の公立中学校に通う女性の友人は、制服にスカートではなくスラックスを選
択した。その友人は小学生の頃からとても活発で、スポーツが好きで、性別を問わずい
ろいろな子と仲良くしているような人だった。

富山県の県立高校では、2020年度に5校、2021年度に8校、来年度には11校で女子
生徒もスラックスを選べるようになったと新聞で読んだ。性別の縛りが性的少数者の生
徒らに苦痛となっているとして県内の高校生が署名活動をしたと記事にあった。署名活
動をしている高校生は、出生時の性別は男性だが、自認する性別が男女のどちらにも当
てはまらない「Xジェンダー」とあった。男女別の制服が高い壁となり全日制高校への
進学を諦めたそうだ。制服でないと教室に入ることはできないとは、皆平等に教育を受
ける権利に反していると思う。そもそも、男だから女だからと分けているのはどうして
なのだろう。性別や見た目に関係なく、個人として一人の人間として、それぞれが望む
格好で学校に通えるようになるといいと思う。今は女性のスラックスが認められつつあ
るが、男性がスカートを選ぶ時が近いうちに来るかもしれない。

現在はLGBTQやジェンダーレスといった言葉が知られるようになり理解が広がってき
ている。一方でそのような人を普通とは違うなどと否定する人も少なくはない。では普
通とは何だろうか。私は男、女どちらかに当てはまるのが普通という考えは正しくな
いと思う。それぞれの性別のあり方が認められるべきだ。

私はスカートをはくのが好きだし、髪を長くのばしたり、メイクをするのも好きだ。
自分の意志で、自分の好きな格好をして、自分らしく生きている。そして世界中の全員
が同じように自分らしく胸を張って生きていけるようになってほしいと強く願う。

男性・女性の在り方

片山学園中学校3年 齊藤 利叶子

「母親なら、子どもを優先するのが普通だろ！」
と夫が妻に向かって怒鳴っている。私が毎週楽しみにしているテレビドラマの一コマである。熱を出した子どもを医療機関に受診させるため、夫婦のどちらが仕事を休むかで揉めていたのである。私の両親は私が産まれた時からずっと共働きだが、私が熱を出したからと言ってこのテレビドラマのような会話を家庭内で耳にした記憶は一度もない。ましてや、母親だから、父親だからと言った線引きも感じたことがなかった。お互いがスケジュール帳を確認しながら、どちらが仕事を休むか、または早退するかを話し合うのが日常的な光景となっている。しかし、世の中にはこのドラマのように、子どもの病気や行事で仕事を休むのは女性、つまり母親であるべきだという考えを持つ人が多くなるという。男性も積極的に育児休暇を取得するよう呼びかけられてはいるが、実際に取得する男性は12パーセント程度で、これでも数年前に比べると飛躍的に上昇したようだ。

少し前は、女性は結婚して子どもを産めば家庭に入り、子どもの面倒を見るというのが普通だったかもしれない。そのため、父親が仕事を休んで子どもの面倒を見るなど普通じゃないことをすると、非常識だと考える大人が多かったのかもしれない。

しかし、時代や社会によって「普通」の在り方は変わるものだと思う。現代は共働きの家庭が多く、男女問わず積極的に社会と関わりを持ち活躍する時代である。私の両親のように、自分たちの基準でどうしたいかを決め、それらを周囲が理解し、認め合うそんな人たちが多くなればなるほど、性別に関係なく皆が気持ちよく生活できる明るい社会になると思う。そんな明るい社会の確立に向けて、私も「男だから」「女だから」という先入観を持たず、様々なことに積極的に挑戦していきたいと思う。

「箱」を壊せ

堀川中学校1年 村田 朔桜

私がこのテーマについて考えた時に思い出したのは、妹が生まれた時の祖父の言葉でした。「また女か。」この他にも男の従兄弟ばかり優遇したり、「家には女の孫ばかりだ。」などと言われ、私も母もとても嫌な思いをしています。何故こんなに差別されるのだろうか？男と女って何だろう？と小さい頃から思っていました。

よくテレビなどで差別による女性の不利益を目にします。結婚したら苗字の問題、家事育児の問題などです。先日も選択的夫婦別姓制度について、違法ではないという判決が出されました。多くの場合、女性が苗字を変えますが、何故、男性側の苗字が優先されるのか。私はどちらの苗字でもよいと思います。家事・育児は女性が担う事が多いですが、昔、母が長期入院していた時に、父は会社の時短制度を利用して家の事を全てしてくれました。この事から男性でも家事・育児に参加する事はいくらかでも可能なのではないかと思います。そうすれば家庭を持つ女性も今よりももっと働く事ができ、昇進などもしやすくなると思うのです。また、負担が減る事によって複数の子どもを育てようと思えば、少子化問題も解決できるのではないのでしょうか。

けれど、女性の差別ばかり挙げてきましたが、私自身も無意識に差別している事があると気付きました。「この色だと男の子っぽいよ。」や「男の子なのに〇〇だね。」などです。男・女という箱があって、全ての事柄をそこに当てはめなければいけないとみんな無意識に思っているのかも。その箱を壊してしまえば性別に捉われる事なく、その人と接する事ができると思いました。そうすれば、自分の性について悩んでいる人も生きやすい社会になるのではないかと思います。

今すぐに祖父のような考え方を变える事は難しいと思います。けれど、まずは自分が無意識の差別をしないように心がけていき、少しでも男・女という箱を壊していければいいなと思います。

「一人一人が輝ける社会を」

西部中学校2年 山岸 祐大

僕は今まで、男女差別について深く考えたことがありませんでした。しかし、男女共同参画について調べたり、考えたりしていくうちに、自分も周りの人も男女差別を受けているのかもしれないと思うようになりました。

思い返せば、家事をするときに、父は母や祖母と協力しているのに対し、祖父は、何もしません。家事は女性がするものだと思っているようです。このような昔ながらの考え方が、男女平等の妨げになっているのではないのでしょうか。

また、僕自身も男女差別を感じさせられた出来事がありました。僕は将来、保育士になりたいと思っているのですが、そのことを他人に話すと、「男なのに？」という反応をされることが多くあります。たしかに、保育士は、昔は「保母」と言われていて、女性しか就くことができない職業でしたが、今は「保育士」として、男女の区別はなくなっています。それでも、未だに保育士という職業は女性のイメージが強いようです。実際、僕が通っていた幼稚園には、男の先生が一人もいませんでした。しかし、男性が保育士になってはいけない、というわけではありません。それを、「保育士は女性」という先入観や偏見で「男なのに」という反応をするのは歴とした男女差別だと思います。

このような経験から、僕は、男女差別になる行動や相手を傷つける発言はしないようにしようと思いました。人は、一人一人、得意不得意や個性、能力があり、それは性別に関係ありません。その個性をお互いに尊重し合うことが男女平等につながっていくのではないのでしょうか。僕は、自分にできる身近なことから取り組むことが男女平等の第一歩になると 생각합니다。そして、すべての人の人権が尊重され、男女が共に、個性と能力を發揮できる社会が実現することを願っています。